
IS インフィニットストラトス 未来を切り開く翼

元帥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニットストラトス 未来を切り開く翼

【Nコード】

N2136R

【作者名】

元帥

【あらすじ】

世界で唯一ISを使える男織斑一夏。

そんな彼の他にもISを使える男がいた。男はある組織で悪と戦いながら自分のやりたいことをさがしていた

男はかつての辛い経験からあることを胸に誓う

「誰かを守りたい」

そんな想いが男を強くした

かつてのの親友との再会、そして学園での出会いが 男にどんな影響を与えるのか

初めての作品なので多少のことは目をつぶってください

オリキャラは最強設定です

ちなみにヒロインはシャルにしようと思っています

プロローグ

日本某研究機関

「とうとう奴が、一夏が目覚めたか。世界で唯一のISを使える男か・・・」

自分が表に出ないうちに先を越されてしまったようだ

「しかしあの人のことだ、自分の弟が有名になってしまったんだ。そのうち俺も・・・」

そう考えると自然と笑みがこぼれる

懐かしの親友とまたばかができると思うと昔の思い出がよみがえる

1人でつぶやいているとある男に声をかけられた

「大介さん、時間です。車が下で待機しています」

ある男に声をかけられた男の名前は緒方龍一

彼は昔から自分の面倒を見てくれた兄がわりであり頼れる部下である

大介と呼ばれた青年は笑顔で答えそしてよんだ彼の方へとしたとき自分の携帯電話が鳴った

「さっそくか。」

ハー、来るとは思っていたけど早すぎないか。ま、仕方ないがな」

大介は静かに携帯をとった

「もしもし、久しぶりですね。千冬姉さん」

電話の相手は親友織斑一夏の姉にして第一回モンド・グロッソ総合優勝及び格闘部門優勝者である

昔は結構お世話になった

「ああ久しぶりだな。元気そうでなりよりだ。お前ならすでに知っていると思うがあのバカがISを起動させてしまつてな。一応学園に入学させたがやはり男では肩身が狭いらしい」

大介はだいたい予想していた。あのひとは自分では否定するが”ブラコン”なのだ

「だいたいわかりました。つまり俺に学園に行けと」

「理解が早くて助かる。頼めるか？」

「もちろん。わかりました手続きの方をよろしくお願いしますね千冬姉さん」

「ああ、まかせろ。それではな」

電話が切れる

大介は街を走る車の窓から夜景を眺めながら笑みを浮かべていた

「楽しくなりそうだ」

1人呟く

そして大介の学園生活が始まる

悪友登場（前書き）

できる限り頑張ります

悪友登場

一夏side

今はクラス対抗戦まつ最中だ。正直キツイ

最初は少しあれだったセシリア・オルコットとも打ち解けることができたおかげでセシリアと幼馴染みの篠ノ之冴にいろいろ訓練をしてもらったのでなんとか防げるが・・

しかし相手が悪い。

この前転校してきた

セカンド幼馴染みの鳳鈴音である

しかも代表候補生なので強い。しかも

彼女と昔した約束を忘れてしまいさらにこの前の口喧嘩で”貧乳”と彼女のタブーを言ってしまった彼女をさらに怒らしてしまったのでよけい強い

ならば

「鈴、本気でいくからな」

「な、なによ・・・そんなこと、当たり前じゃない・・・。」

鈴はバトンのように両刃青龍刀を一回転させて構え直す

俺は衝撃砲がその砲火を吹くまえに距離を詰めようと加速姿勢に入る

この一週間で身につけた技能”イグニッションブースト”は出どころさえ間違えなければ代表候補生クラスとも渡り合えるはずだ

雪片式型で鈴に斬りかかろうとした瞬間

ズドオオオオンッ！！

「「！？」」

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った

鈴の衝撃砲ではない

威力が段違いだ

「なにが起こっているんだ」

一人混乱していると鈴からプライベート・チャンネルが飛んできた

《一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！》

なにをいきなり言い出すのか。そう思った瞬間、ISのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた

・ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています

「なっ——」

アリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている

それを貫通するだけの攻撃力をもった機体の乱入、こちらをロックされています

まさしくこれはピンチです

《一夏、早く！》

鈴が叫ぶ

「お前はどつするんだよ！？」

まだ相手との回線の開きかたがわからないので俺はオープンチャ

ンネルで聞く

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって…女をおいてそんなことできるか！」

「馬鹿！アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが！」
遠慮なく言われ心が痛む

ちなみに鈴も俺がプライベート・チャンネルで返さないのだから鈴も普通に喋ってきた

「私だって別に最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやってきて事態を収拾！」

「あぶねえっ！！」

間一髪、鈴の体を抱きかかえてさらう。

その直後にさっきまでいた空間が熱線で砲撃された

「ビーム兵器かよ・・・しかもセシリアのISより出力が上だ」

相手のデータをみて冷や汗がながれた

「ちよっ、ちよつと、馬鹿！離しなさいよ！」

「お、おい、暴れるな。ーって馬鹿！殴るな！」

「う、うるさいうるさいうるさいっ」

シールドエネルギーで守られているとはいえ、連射砲のごときパンチを顔に向かってされているのだ。気分のいいものではない。

「だ、大体、どこ触ってー」

「！来るぞ！」

うるさい鈴はさておき、煙を晴らすかのようにビームの連射が放たれる

それをどうにかかわすとその射手たるISがふわりと浮かび上がった

「なんなんだ、こいつ・・・」

姿からして異形だった。深い灰色をしたそのISはてが異常にながく、つま先よりしたまでのびている。しかも首というものがない。肩と頭が一体化しているような形をしている

何より特異なのが、その《全身装甲》だった

「

通常、ISは部分的にしか装甲を形成しない。なぜか。必要ないからだ。防御はほとんどがシールドエネルギーによって行われている

だから、見た目の装甲というのはあまり意味をなさない。もちろん防御特化型ISで物理シールドを搭載しているものもあるがそれにしたって肌が一ミリも露出していないISというものは聞いたことがない

そしてその巨体も、普通のISではないと物語っている。

「お前、何者だよ」

「・・・・・・・・」

まあ当然だが。

謎の乱入者はこちらの呼び掛けに答えない

『織斑くん、鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧にいきます！』

割り込んできたのは山田先生だった。心なしか、いつもより声に威厳がある。

「ーいや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます」

今ここでだれかが相手をしなくては観客席にいる人間に被害が及ぶ可能性があるということだ

「いいな、鈴」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば！動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

俺が腕を離すと、鈴は自分の体を抱くような格好で離れる。うーん、そこまでいやだったか。そいつは悪かった。

『織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったらー』

言葉はそこまでしか聞けなかった。敵ISが体を傾けて突進、それを避けるのに集中するー成功

「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

俺と鈴は横並びになってそれぞれ得物を構える。

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょう？」

「そのとおりだ。じゃあ、それでいくか」

キンツと互いの武器の切っ先を当てる。それが合図。俺と鈴は即席コンビネーションで飛び出した

その頃

「もしもし！？織斑くんきてます！？鳳さんも！聞いてますー！？」

ISの開きかプライベート・チャンネルは声に出す必要は全くないのだから、そんなことを失念するくらい真耶は焦っていた

ちなみに、周囲から見るとただの危ない人であることは間違いない。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！何のんきなこと言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「・・・あの、先生、それ塩ですけど・・・」

「・・・・・・・・」

なんとも言えない空気が流れる

ピタリとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を容器に戻す。

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ・・・？でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど」

「・・・・・・・・」

「あつ！やっぱり弟さんのことが心配なんですネ！？だからそんなミスをー」

嫌な沈黙。 嫌な沈黙だった。

千冬side

私入ったい何をしているのだろう。

弟が危ないとはいえあの程度で動揺するようではわたしもまだ未熟だな

しかし大介あいつはいつになったらくるのだろうか

時間にルーズなのは知っているが さすがにおそすぎる！
奴がこの場にいればすぐに片づくのだがな

そんなときオルコットが頭を押さえながらベンチに座った

「はああ……。結局、待っていることしか出来ないのですね」
あいつはなにを言っているのだろう

「なに、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって!？」

「お前のISの装備は一对多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

「そんなことはありませんわ！このわたくしが邪魔だなどー」では
連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ビットをどういう風に
使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連続稼働時
間ー」わ、わかりました！もう結構です！」

「ふん。わかればいい」

放っておいたらそれこそ一時間でも続きそうな千冬の指導を、セシ
リアは両手を揺らして止める。『降参』のポーズであった。

そんなことをしているうちに千冬に通信が入る

「千冬姉さん。一夏達が危険なんだけど救援に入っていない？」

「遅いぞ！！まったく心配させおつて。フツ存分に暴れるがいい」

千冬の言葉にクエッションマークを浮かべる皆さん

千冬side out

一夏side

やっと敵の弱点をつかむことができたがこちらもピンチだ

残りのエネルギーは少量だが鈴の衝撃砲のおかげで

右手の《雪片式型》が強い光を放つ。中心の溝から外側に展開したそれは、一回り大きいエネルギー状の刃を形成していた

―《零落白夜》―を使用可能

エネルギー転換率90%オーバー

その情報を聞くだけではなく理解していた

初めてISに触れた時にも感じた一体感。世界自体を把握できるようなクリアな五感。集中力が数十倍にも跳ね上がったかのような高解像度の意識。そして何より、全身から沸き立つような力を感じる

（俺は・・・千冬姉を、簞を、鈴を、関わる人すべてを―守る！）

必殺の一撃は敵ISの右腕を切り落とした。

「よし！」

しかし、せの反撃で俺は左拳をモロに受ける。さらに接触面から熱源反応

「うぐっ」

ゼロ距離からビームを叩き込むつもりらしい

「『一夏！』」

叫ぶセシリア、篝、鈴

「くそっ

ここまでか…」

諦めかける一夏

そんなとき上空より敵ISに向かって黒いISが舞い降りた

突然現れたのかISによって一夏が敵ISから解放された

「なっ!？」

突然のことで一夏は脳が追いつかない

黒いISは敵と同じ全身装甲でありながらスリムで背中に翼がついていて

その姿はまるで『黒い天使』だった

一夏side out

大介side

敵ISが一夏目掛けてビームを打とうとしていた

「たく、あぶねえな」

千冬姉さんに許可をもらったので助けに入った

大介 s i d e o u t

「たくよー一夏、気抜いてんじゃねえぞ」

なんとかギリギリ一夏を救出完了」

一夏はなにが起こっているかわからなかった。

「たくよー悪友のことぐらい覚えておけよ」

「なっ、まさかお前大介か？」

「ビンゴ！！やっと気付いたか。流石に俺でも傷つくぞ」

二人の感動の再会は敵I S よって邪魔された

「つとに、無粋な奴だ」

大介は呟くと瞬時に敵I S の裏に回り込み
細切れにした

「なっ早い！？つーが大介。お前強すぎないか！？」

「そ〜か？まあいい。戻ろうぜ姉さんのところに」

「あぁ」

一夏は大介に背負われピットに戻った

悪友登場（後書き）

なんかいろいろと辛い

オリキャラ説明とその他説明（前書き）

修正しました

オリキャラ説明とその他説明

人物説明

覇牙・A・大介 はが・アルハザート・だいすけ

15歳

専用機（仮） 《ゴッドフリーダム》 自由の神

イメージ

漆黒のストライクフリーダムをイメージしてください

国連特殊部隊所属の准将でラウンズ最強のナイトオブワンである
ナイトオブラウンズ

武術、頭脳ともに優れており、武術に関しては代表候補クラスならばIS無しでも戦える

また、彼の祖先が霸王であったことから彼の武術実家に伝わる霸王流と空手、ムエタイ、中国拳法を主とする

昔、ちょっとしたことがきっかけでISを起動させてしまった青年。

日本政府で極秘に代表候補生となり、すぐに頭角を表し代表になったが辞退した
その後、

国連の保有するIS部隊に選出された

ナイトオブブラウズ

織斑一夏とは小学4年から6年まで共に過ごした悪友である

容姿は赤っぱい黒髪でワイルド系イケメンでありモテるが本人自覚無しなので中学の時の異名が《天然女殺し》と裏で言われていた

特殊能力

デステイニーブレイク&ソニックムーブをもつ

デステイニーブレイク

大介が生まれつき持っている能力

起こりうる全ての可能性を否定する能力（他に2つあるが文中で）

しかし、生き物には使用できない

ソニックムーブ

霸王流に伝わる移動法

イグニッションブースト使用時と同じスピードで移動する能力
30秒しか使用出来ないのが欠点

ナイトオブブラウズ説明

ナイトオブブラウズは国連加盟国の中でも特にIS関連で有力な国

（現在、日本、アメリカ、イギリス、中国、ロシア）の中からから選ばれた各国の最強12人が所属している（男は大介を加えて3人）

ラウンズはナイトオブワンからトウエルブまでで構成されている

ラウンズには独立行動許可とIS研究のための研究所と研究員が与えられる。また、ナイトオブワンからスリーは個人の部隊を持つことができる

IS説明

ゴッドフリーダム
通称自由の神

全範囲対応殲滅型
第6～7世代IS

ナイトオブワンである大介の研究機関が研究の末、完成させた大介専用機。
ブラック・ロード

（大介の研究機関の人間は個人的に集めたので国連側は把握していない。しかも、研究員のほとんどが篠ノ乃東以上か同等の頭脳をもつ）

大介の力を最大限まで引き出す為に作られた機体ので並みのISとは比較にならない

最大速度が音速を越えるので一応全身装甲になっている

また、独自に開発したU・E・S（無限エネルギー変換システム）を搭載しているのでエネルギーが尽きることはほとんど無い

U・E・S（無限エネルギー変換システム）とは自然のエネルギー

（太陽・風・雨など）を自分のシールドエネルギーに変換するシステムである

その他は文中で・・・

学園ではリミッターをつけているので第3世代並である

だが、ゴッド・フリーダム は大介の本来の専用機ではない
一応本来の専用機が完成するまでの代わりである

待機状態は黒いロザリオのついているブレスレットである

オリキヤラ説明とその他説明（後書き）

ちよつとめちやくちやかも…

転校生がやって来た（前書き）

やっと受験が終わった

辛かったよ、マジで

そんなわけでやっと主人公が転校してきます

転校生がやって来た

一夏と大介がピットに戻ると千冬が待ち構えていた

千冬 side

なんとか間に合ってくれたか。

内心、弟が心配だったが奴がきた時にその心配が吹き飛んだ
しかし遅刻した大介の罰は何にしてやろうか

そんなことを考えている内に大介が敵ISを斬り倒し一夏と共に戻
ってきた

千冬 side out

大介 side

ピットに戻ると千冬姉さんがいた

やはり一夏が心配だったに違いない。ここは一つからかってやるか

「ただいま千冬姉さん。愛しの弟を」「黙らんか!!馬鹿者が」い
つて。殴らなくてもいいじゃないか!」

言い切る前に思い切りグーで殴られた
相変わらず痛い

「ところで大介。転校初日から遅刻するとは何を考えている!なぜ、
くるのがこんなに遅れた?朝一で来いといったはずだが?」

千冬姉さんが当たり前前のことをきいてきた

まゝ当たり前と言っちゃ当たり前だが、正直に言って許してくれるだろうか

「遅れた理由は2つある。一つは俺の専用機ユ・エ・フ・リ・ダ・ムの最終調整が大幅に遅れたから。もう一つは……

寝坊したからです!!」

バシユツ!?

思い切り殴られた

予想通りだけどさ、痛いものは痛いよね（笑）

「この馬鹿者が!!前者は良しとするが後者は許さん!明日までに反省文を書いてこい。あと、明日こそは遅れず学園にこい。

本当は今日中に済むはずだったのを貴様が遅刻などするから面倒事が片付かない!」

「はい」

はゝ反省文か。一夏を助けたんだからチャラにしてくれてもよくね!

大介 side out

一夏 side

突然のことで頭がパニックっていた

敵にやられそうになった時、助けてくれたのは親友だった。

千冬姉は知っていたようだ。

てっ!!

さつき転校初日とか言ってたよな。

ていう事はあいつが朝、山田先生が言っていた転校生なのか!?

「大介。一応聞いておく。なんでここにいるんだ?」

俺は千冬姉に頭を殴られうずくまっている大介に聞いてみた

「んーと、一応今日からIS学園の生徒といったところかな。本当は朝一で行けると思ったんだけど立て込んでちよっち遅れちまったわけだ」

「成る程な。つーことはお前が先生が言ってた転校生だったのか」

「先生が言ってたって・・・」

つーことは同じクラスか。良かったは知ってる奴がいてよ」

大介が安堵しているところ悪いがあの手を教えてやろう

「大介。残念なお知らせだ
担任は・・・・・・・・」

俺は千冬姉のことを見る

大介もつられて見ると

「・・・・・・・・」

イヤ~~~~~「バコンッ」ウゲ!？」

大介が千冬姉に殴られた

「なにか問題でもあるのか……大介よ」

大介を睨む千冬姉

「……イイエ、ナンノモンダイモアリマセンヨ。オリムラ
センセイ」

アゝ大介が蛇に睨まれた蛙になつてるよ（笑）

一夏side out

大介side

一夏のやろう、わざとだな。完全に笑いを堪えてやがる。いつある
かわからんが実習でシメテやる

「ところで千冬姉さん。俺の部屋はどこだ？」

「ああ、お前の部屋はちゃんと用意してある。二人部屋なのだが今
のところお前一人だ。あと荷物は既に部屋に運んである。ゆっくり
休むといい。注意事項の書類などは部屋の机に置いてある」

「ああ、わかった。今日はゆっくりさせて貰うよ。じゃあな一夏、
千冬姉さんまた明日」

「また明日な大介」

「明日は遅れるなよ」

二人にあいさつをして部屋に向かった。

大介 side out

大介が部屋に向かってから5分後、鈴・セシリア・篤・山田先生などのメンバーがピットにやってきた。

一番最初に声を出したのはセシリアだった

「織斑先生！！さっきの方は何なんですか？突然現れて、それに声からして男性でしたわ。説明して下さい」

次に鈴が口を開く

「一夏、もしかしてさっきのって大介？」

「なんだ鈴気づいてたか！その通りだよ。」

「鈴さん！！あなたは彼のことをご存知なんですか！？」

「ええ。あいつは大介、霸牙大介。あたしと一夏と同じ学校に通ってた幼なじみよ。小学生の癖に喧嘩が強くて、よく近所の不良達と喧嘩してたわ。そのわりに頭がよくてテストとかも学年トップクラスだったわ。中学に上がる前に急に転校しちゃったのよね」

鈴が懐かしいむように言い出す

「確かに強かったよな」。不良50人相手に1人で戦ってかすり傷4箇所だけだったからな」

「それは本当ですよ!？」

「ああ。たしか、いろんな武術をしてたな。えゝと、空手とムエタイだったかな」

「それプラス、中国拳法と大介の家の霸王流だったかしら」

セシリアが一夏と鈴から大介の説明を受けていたとき千冬が割り込んできた

「オルコット。奴の事が知りたいのなら明日、本人に聞け。いいな？」

「・・・・・・はい。」

大介side

アゝ反省文かぁ。相変わらず厳しいよな、千冬姉さんは。

つゝかめつちや眠い。早く寝たい。

そんなにことを考えていると部屋の前に来ていた
「えゝと1027号室はゝと

あつた!」

中に入るとベッドが2つ並んでいた

「流石に二人部屋だからしょうがないよな
まーいいや、せっかくの二人部屋に1人だし有効活用させてもらおう。」

でも、まずは……………
……………寝る」

俺は明日から始まる楽しい日々を想像しながら眠りについた

大介 s i d e o u t

翌日

大介 s i d e

俺はいつもより早く目覚めてしまった。

「あと、一時間は眠れるけど眠くない。この一時間なにをするか」

俺は広い部屋なので武術の型をすることにした

一番集中できるんだよね（笑）

大介 s i d e o u t

一夏 s i d e

昨日千冬姉に大介の部屋を聞いたと良かった。しかも、俺の部屋の2つ後ろだった。

大介の部屋のベルを鳴らすが反応がない。

ドアはあいていた。

「大介く入るぞ。オーイ」部屋に入ると空気がかわった。例えるならば、冷たく鋭いと言えばよいのだろうか、そんな空気だった。

そんな中いつもと雰囲気異なる大介が立っていた。

大介が動いた

無駄のない洗練された動き。まるで日本刀のように美しく鋭い技の数々。

俺は見とれていた。

そんな時、大介が俺に気付いた。

「なんだ一夏いたのか。声かけてくれればいいのに」
さっきまでの雰囲気とは打って変わっていつもの大介になっていた

「いや、ちょっと声かけずらかったからさ」

「悪かった、悪かった。んでなんだ？」

「あつそうだ！！朝飯に誘おうと思ってさ」

「あ、いや。悪い！！朝一で千冬姉さんのとこにいかなきゃいけないんだよ」

「そうか。わかった。また後でな」

「ああ。また後でな」

俺は大介の部屋を出て食堂に向かった。

一夏side out

大介side

一夏がいるのにまったく気付かなかった
やっぱり、あれは集中力がハンパではない。回りが見えなくなる

一夏に朝食に誘われたが千冬姉さんのところにいかなきゃいけない
から断った。でも、腹は減っているからカロリーメイトを食いなが
ら部屋を出た

大介side out

職員室 千冬のdesk前

「やっと来たか。遅いぞ覇牙!!」

「いや、時間てきにはぴったしなんですけど。あと昨日言われた反
省文です」

「5分前には来い!!」

反省文の方は問題ないな」

一通り反省文に目を通すと千冬は椅子からたった
「それでは教室にいくぞ。ついてこい」

「はい」

教室

ガヤガヤ、ガヤガヤ

今日は一段と教室が騒がしい。理由はご存知の通り昨日こなかった転校生が来るからだ。

ガラガラ

ドアが開く

入ってきたのは千冬だった。

「諸君！！今日は知つての通り昨日こなかった転校生が来ている。それでは、入れ」

入ってきたのは背が高く、筋肉質な体の黒髪が綺麗なツンツンした髪型と整った顔を持つ青年だった

「皆さん初めまして。俺の名前は覇牙・A・大介。趣味は音楽活動と鍛練などです。一年間よろしく」

「キヤー二人目の男子きたー」

「しかも、ワイルドなイケメン！！」

「お母さん。私を産んでくれてありがとうー」

女子が叫ぶ

「うるさいぞ！！馬鹿どもが静かにせんか！！」

千冬がうるさい生徒を出席簿で殴る

「霸牙の席はあそこだ。わからないことは織斑に教えてもらえ」

「はい」

HRが終わると女子が一斉にきた

「霸牙君って彼女いるの？」

「好きな食べ物？」

「好きな女の子のタイプは？」

「え〜と、その」

一斉に質問されて困る大介

「一夏 help me」

助けを求めるしかない大介だった

転校生がやって来た（後書き）

つぎの話ではセシリアとの戦闘シーンを入れたいと考えています

決闘！？　そして、明かされる正体（前書き）

高校受かりますように……………

もう、どうにでもなれ

決闘！？　そして、明かされる正体

大介 side

俺は女子達からの質問攻めを耐え抜き脱け殻になっていた

「ちよつとよろしくて？」

お約束のように金髪ロールが話しかけてきた

「んだよ。つかなんの用だよ」

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

なんだよこいつ。何様のつもりだ？

つか、あつちで一夏の野郎が昔を懐かしむようにこちらをみていた

「つか、俺お前のこと知らねーし」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

まったく知らん。

つか知る気もないけどね

「じゃあ何だよ。代表候補生のセシリア・オルコットさん？」

「わ、わたくしを馬鹿にしていますの？代表候補生のわたくしを」

たく、うぜーな

「何だよ。たかが代表候補生だろ。代表じゃない。だからなんの用だつて聞いてるんだよ。代表、”候補生”のセシリア・オルコットさん？」

馬鹿にして挑発してやると耳まで真っ赤にしてこちらを睨んできた

「わたくしに恥をかかせましたね！？もういいです。・・・決闘です！！いいですわね！！」

たくつ めんどくさいな

そんなことをしていると千冬姉さんが入って来た

「馬鹿ども席に着け・・・・・・・・なんなんだ、この騒ぎは？」

「織斑先生！！彼と決闘させてください！！この島国の猿に力の差をみせてやりますわ」

んっ！？あいつ猿つていったか？この俺を・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・ぶつつん 切れちゃったよ俺。
もう知らないよ。喧嘩吹っ掛けたのはあいつだからね？

「織斑先生。俺からもお願いします。流石にあそこまで言われて黙つててやるほど俺は優しくくない。」

「まったく。お前らときたら。仕方ない。放課後なら許可する」

「それでいいですわ！！」

「俺も構わない。んでオルコット。ハンデをつけてやる。どのぐら

「いいいい？」

そう言った瞬間クラスの女子全員が笑った

「霸牙君、それ本気でいつてるの？」

「男が女より強いなんて昔の話だよ！」

「逆にハンデつけてもらったほうがいいんじゃない？」

ムカつくわゝマジで

「お前ら勘違いしてないか？お前らが言っているのは男がISを使えないことを前提とした話だろ？つまり、条件が同じならあとは経験と本人の力量次第だ」

「そ、それはそうだけど……」

クラスの女子が静まりこむ

「オルコット。本当に霸牙にハンデをつけてもらわなくていいんだな？」

「当たり前ですわ。まっわたくしの圧勝で終わると思いますが」

「はゝゝオルコット。後悔するなよ？それから霸牙。やるからには絶対に手を抜くな。わかったか」

「はい」

少しあの鼻の伸びたお嬢様を調教してやろう

大介 s i d e o u t

一夏 s i d e

大介がえらいことになってしまった。

確かに大介は強かったが代表候補のセシリアに勝てるとは思えない
それにこのくだり前の俺と一緒にゃんか

アゝ放課後になるのが恐ろしい・・・・・・・・

一夏 s i d e o u t

授業が終わり一夏が大介の方へとやってきた

「大介！大丈夫かよ？相手は仮にも代表候補だぜ？無理だつて。」

「たくつどいつもこいつもいいこといいやがつて。まあいい。」

一夏！本当の強者がどういう人間か放課後の決闘でおしえてやるよ」

そんな会話をしたり、いくつかの授業 を受けているうちにあつと
いう間に放課後になった

アリーナ

大介 side

さて、あの高飛車なお嬢様にどんなお仕置きしてやろうか

「それでは覇牙、オルコットISを展開しろ」

「はい」

オルコットはすぐに展開したが俺はしない

「覇牙なぜ展開しない？」

「いや、IS使うまでもないかなと思ひまして」

「なっなんですよ！？わたくしを馬鹿にしてますの！？」

オルコットが怒った

「覇牙、一応決闘だ。相手に失礼だろ？それにもしもけがをされてはかなわん」

「わかりました。」

俺は^{「ミッド・フリーダム」}相棒を展開した

漆黒の天使のようなIS。俺と俺の研究機関^{ブラック・ロード}によって開発された俺の最高の機体。

そして俺とゴッド・フリーダムにできないことはない

「かつこいいい！！」

「黒い天使だ」

女子が騒ぐ

「霸牙、早く翔べ。オルコットが空で待機している」

「はい」

「それから霸牙。あの鼻の伸びた代表候補に本物を教えてやれ」

「はなから、そのつもりですよ」

俺は空へと飛んだ

大介 s i d e o u t

大介が空に上がるとセシリアが待っていた

「逃げずに来ましたわね。今ならまだ許して差し上げますけど。なにせわたくしはエリートですから」

「お前こそ後悔するな。織斑先生お願いします」

「うむ。それでは……………始め!」

二人の決闘が始まった

一夏 s i d e

大介あんなに大口叩いて大丈夫かよ

千冬姉も千冬姉だ。セシリアを舐めすぎじゃないだろうか

たしかに大介は強かったけど今回は．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．

一夏side out

大介side

千冬姉さんから開始の合図があつた

少し遊んでやるよ

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・
ティアーズの奏でるワルツで！」

「すまないな。俺はロック派だ」

オルコットの『スターライトmk3』が俺を襲う

しかし俺には当たらない　つか当たるきもないし

「くっなんてあたりませんの!？」

「おいおい、代表候補でもそんなに焦ってたら当たらないぞ。」

「うるさいですわ!！」

ヤケになって打ちまくる

当たらないものは当たらない。それに俺まだ攻撃してないし。

30分後

「ハーハーハー」

流石に息を切らすオルコット。

シールドエネルギーの残りも少なそうだし攻撃するか。圧倒的な力の差を見せつけてやろう

「オルコット。終わりだ」

俺はフリーダム・ハート（フリーダムの近接戦闘用の武器。後程説明します）を大太刀にかえる

「な、なんですのそれは!?!」

俺は瞬時にオルコットの懐に入り斬りかかる

「くっ『インターセプター』!」

「無駄だ」

『フリーダム・ハート』が『インターセプター』を砕こうとしたとき俺の上方と下方からレーザーが飛んできた

「ちっ邪魔だ!!」

俺はオルコットを蹴り飛ばすとビームシールドを展開した

「レディーを蹴り飛ばすなんてどうかしてますわ。『ブルー・ティアーズ』!!」

オルコットが叫ぶと『ブルー・ティアーズ』が俺の方に飛んできた
「ビット兵器か。邪魔くさいな。しかし、オルコットよ、俺にビームシールドを展開させたことは褒めてやるよ。だから、少しだけ本気でやってやる」

「なっ今まで本気じゃなかったってことですよ!？」

俺は『ブルー・ティアーズ』を瞬時に切り捨てると『ソニック・ムーヴ』でオルコットに距離を詰める

「早い!でも、甘いすわ。『ブルー・ティアーズ』はまだ残っているよ」

「関係ない。くらえ、霸王流抜刀術壱ノ型……霸王断空斬!!」

瞬間、空気が割れた。オルコットの『ブルー・ティアーズ』が細切れになり、オルコットがぶっ飛んだ

「やはり、加減が難しいな。しかし、ちよつとヤバイな。オルコットの奴、気絶してISが解けて落下してやがる。しゃーね、助けるか」

俺は黒い翼を展開しオルコットの救出に向かう
地表五メートルの位置でキャッチした

大介 side out

セシリア side

わたくしは敗れた。圧倒的な力の差を見せつけて。しかし、不思議と悔しくはなかった。一夏さん意外の男は猿だと思っていたが間違いだった

一夏さんより強い人。強い思いを秘めた瞳をもつ男性だった。

わたくしはそう思いながら落下していく

気がつくともISは解除されていた

わたくしはこのまま死ぬのかしら

わたくしは覚悟を決めて目をつぶる

しかし、突然暖かいものに身が包まれた

「大丈夫か？」

なんとさっきまで戦っていた覇牙さんがわたくしをお姫様抱っこしていた

「なっなにをしてますの!？」

「いや、お前を助けたただけだけど」

「そ、そうですか」

顔が熱くなる。そして、安心すると同時にわたくしは意識を失った

セシリア side out

大介はセシリアをお姫様抱っこしながら地上に降りた

「おい一夏!!!オルコットを保健室につれてってやれ」

「お、おう」

「馬鹿者！！自分がやったことだ、自分でつれてけ」

「・・・・・・はい」

大介はISを解除するとセシリアを保健室へと連れていった

千冬side

あの馬鹿本気でやれと言ったがあそこまでやるか？
そんなことを考えていると一夏が声をかけてきた

「千冬姉！！なんで大介はあんなに強いんだよ」

バコン！！

「馬鹿者。『織斑先生』だ」

私は一夏の頭を出席簿で殴る。こいつは学習能力がないのか？

「織斑先生！！私も知りたいです。」

「先生、私も！！」

クラスの女どもがきいてくる
めんどくさいから話してしまうか

「わかった。話してやるから静かにしろ」

「・・・・はい」

疲れる

「は。まず織斑、お前はナイトオブブラウズを知ってるか？」

「し、知りません……」

「たく、そのぐらい勉強しておけ。それでは、ナイトオブブラウズからだな。ナイトオブブラウズというのは国連のIS部隊で簡単に言うと世界最強のIS部隊のことだ。各国の最強のISパイロット、12人が集まっている。」

「くくへくく」

なんなんだこいつらは！？

「そして、大介はそのナイトオブブラウズの1人だ」

「えっ、男の大介が！？」

「ブラウズの中には男が大介を含め3人いるらしいがはっきりしていない。それに、あいつはナイトオブワンつまり、ブラウズの頭だ。」

「くくえくマジ！？」

「マジだ。ブラウズはワンからトゥエルブまでのあり、そのなかでも上位3人つまり、ワンからスリーは他のメンバーとは比較にならないらしい。さらにトップのワンはその3人の中でもさらにその上をいくらしい」

「もしかして、事実上大介が最強のIS使い？」

「恐らくそうだろう。私でもあいつと同じ性能のISを使っても勝てるかわからん」

「マジッスか・・・大介に教えてもらおう」

「他に聞きたいことがあったら本人に聞け」

「はい」

はは疲れた

千冬side out

大介side

オルコットが目を覚まし俺のことを聞いてきたので答えた

最初は驚いたようだが次第に落ち着きを取り戻した

「まあ俺が言えるのはこんなところかな。あと、悪かったな。ちょっとやり過ぎた」

俺は頭を下げた

「そ、そんな頭を上げて下さい。それにわたくしはあなたに教えていただきました。・・・だからありがとうございます」

「オルコット「セシリアでいいですわ」わかった。セシリアこれからよろしく。あと、俺も大介で構わないよ」

「よろしくお願いいたしますわ。だ、大介さん」

俺とセシリアは握手をした

大介 s i d e

大介はクラスのみんなが自分のことを知ってしまったことは知りもしない

決闘！？　そして、明かされる正体（後書き）

やっぱりバトルシーンは苦手です

そろそろシャルを出したいけどあと2、3話だしてからかな

地獄の訓練と転校生（前書き）

なんとか高校合格しました！！

んで、溜め込んだISを見てたら震度6強の地獄がありました
めっちゃ焦りました？

被災された方々の笑顔がいち早く戻るよう心から祈っています

また、その他のみなさんも節水、節電に協力お願いします

我慢しきれずシャルを出してしまいました

3月22日

ちよっと修正しました

地獄の訓練と転校生

セシリアとの決闘後、大介と一夏は食堂にいた

「大介がナイトオブワンだなんて知らなかったぜ」

「つか一夏、お前ラウンズすら知らなかっただろ？」

「たしかに・・・でもしょうがないだろ？最近ISを使い始めたんだ。使い始めるまでISに興味なかったしよ」

「ハハたく、お前って奴は。ある意味常識だろ？ホント千冬姉さんに同情するよ」

二人は夕食を食べながら会話をしていた

「お隣よろしいですか？」

「ああいいよ」

セシリアがやってきた

「大介久しぶりね！！」

「おお！？お前鈴か？」

「そうよ！！小学校以来ね」

「ああ。つかお前、成長してないな。性格といい体型といい」

「うるさいわね！！余計なお世話よ。てゆうか、あんたも変わってないじゃない。体はともかく、性格は」

鈴が言つと大介が鈴の耳元でささやいた

「おい鈴。あいつとは何か進展あつたのか？ライバル多いから大変だぞ」

「なっ！？一夏とそんなことあるわけないでしょ！！」

「えゝ誰も一夏とは言つてないぞ？」

「！？うゝゝゝ」

鈴の顔が赤くなると大介は鈴から離れ座席に戻る

「まっ鈴も座れよ。あと、篠ノ乃も」

「わかつてるわよ」

「ああ」

みんなが席につき会話が始まつた

「なあ大介？ちょっと頼みたいことがあるんだけどさ」

「んっなんだ？」

「俺にISについて教えてくれ」

「はっ？つかなんで俺？セシリアや鈴がいるだろ？」

「やっぱその道のプロに教わつたほうがいいと思つてな！！」

「教えるのはいいけどたぶん一夏じゃついてこれないぞ」

「大丈夫だって。安心しろよ」

「しょうがねーな。でも、金取るぞ」

「マジかよ!？」

「冗談だよ」

という訳で大介が一夏の先生になりました

大介 s i d e

ついつい引き受けちまったけど大丈夫か？

はつきり言って生半可な覚悟でやったら死ぬかもな

「まーいいや。一夏！俺、夜トレーニングするんだけど一緒にやるか？」

一応聞いとくか。まっあいつのことだ、やるって言おうと思うがな

「えっいいのか!？やるやる♪」

ビンゴ!!

「一夏ちょっと待て!!そうしたら私との訓練はどうなる」

篠ノ乃が何か言っている　セシリアはなんかこっちを見ている
何故？

「あつ悪い幕。でもさ、より早く上達するんだったらプロに習った方が良いと思わないか？」

「それはそうだが・・・・・・・・・・・・・・・・」

なるほど、あいつも一夏のことが好きなのか！

たくつあの唐変木、篠ノ乃といい鈴といい、いい加減気づいてやれよ

「篠ノ乃安心しな。別にお前から奪い取る訳じゃない。つか、男に興味ないしな」

「なっ！？そうゆう意味で言ってる訳じゃ！？」

「大介！！お前、男が男に興味ないのは誰だってわかるだろ！！」

一夏、お前は馬鹿か！！

唐変木のお前でもわかるように言ってやったのに

篠ノ乃も可哀想に

「まっ兎に角だ一夏！！来る気になったら来い。第2アリーナにいるから」

「あのー大介さん。わたくしもお邪魔してよろしいですか？」

「大介、私も！！」

セシリアと鈴までもか

致し方ない

「わかった。いいぞ、んじゃお先」

俺はアリーナの使用許可を取りに千冬姉さんのもとへと向かった

職員室

「織斑先生はいらっしゃいますか？」

やっぱり職員室の雰囲気は好かない
何というか堅っ苦しい

「霸牙か。何のようだ？」

「あ、いや第2アリーナの使用許可が欲しくて」

「そうか。わかった、細かい手続きはこちらでやっておこう」

「ありがとうございます。織斑先生」

俺は千冬姉さんに礼を言うと職員室を後にした

大介 side out

第2アリーナ

大介が向かうとすでにみんないた
一夏は既に白式を展開していた

「遅かったな大介。管理の人に大介の名前言ったら入れてくれたぞ」
「悪かったな一夏。つかなんで白式を展開してるんだ？」

「えっ何でって訓練するんだろ？だったらIS展開するのは当たり前だろ？」

「馬鹿野郎。初めからIS使つかボケ！！まずは、アップからじゃ」

大介はアリーナ内を走り始める。
それに続いて一夏も走り始める

20分後

「なあ大介、いつまで走るんだよ？」

「なんだ一夏、もうバテたのか？たるんでるな（笑）」
「このやろう」

そして走り始めて1時間たった
一夏は息を切らしてた折れ込んでいた

「一夏、お前はISの前に体力つける。そんなんじゃ、長時間の戦闘はできないぞ」

「はあ、はあ、はあ、わ、わかつてるって」

「まあいい。5分間休憩だ。ちゃんと体力回復しとけよ？ほら、鈴、篠ノ乃！！一夏を元氣付けてやれ」

そう言われ一夏のもとへと行く鈴と幕

「大介さんは疲れないんですか？」

「こんなんで疲れるような鍛え方してないよ。ほら、セシリアも一夏を元氣付けてやれ」

「は、はい」

5分後

「よし！！一夏始めるぞ！！」

「くっもう5分たったのかよ」

「一夏、これからはISを使った訓練だ。はつきり言ってさっきのランニングとは比べ物にならない位厳しいぞ？止めるなら今のうちだ」

「誰が止めるか。俺を甘く見るなよ？」

「上等！！んじゃ、始めますか」

ここからはどうなるか想像できる人もいるだろう

「ぎゃゝセシリア助けてくれ！！殺されるゝ。あいつは俺は殺す気

だー」

「一夏！！待ちやがれ！！死にたくなかったら耐えろ！！俺が直々に教えてやってるんだ、気合いで耐えろ！！」

こんな感じだ

ちなみに葦、セシリア、鈴は大介の変貌ぶりに引いている

3時間後地獄の訓練は終わった

「死ぬかと思った」

「安心しろよ一夏。生きてるから」

今回のことから一夏は大介の訓練を受けることを断念した

各自アリーナから自室に戻った

大介 s i d e

訓練が終わり自室に戻った俺はひとまずシャワーを浴びることにした

やはり一夏には耐えきれなかったか

まああれに耐えきれないやつの方はすごいわな

そんなことを考えていると通信が入った

「どうした？・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・そうか。わかった。今日中にそちらに
向かう」

はあゝ仕事か。まあしかたないけどな
あつ千冬姉さんに連絡しないと

俺は千冬姉さんに通信をいれる

「なんだ覇牙、こんな夜中に」

「織斑先生、明日から少し学校休みます。理由は緊急召集といえ
わかりますか？」

「なるほど、わかった。細かいことはこちらでやっておく。」

「頼みます。千冬姉さん」

「任せろ大介。いつてこい」

千冬姉さんに連絡入れたし行きますか

俺は部屋の鍵を締め学校をでた

大介 s i d e o u t

翌日

「皆さんおはようございます」

いつものように山田先生が朝の挨拶をする

「先生ー覇牙くんは休みなんですか？」

女子の1人が山田先生に聞く

「覇牙は私用で休みだ」

千冬が答える

「それってやっぱりラウンズの任務かなにかですか」

「お前から知る必要はない。山田先生」

「はい！！え〜と皆さん今日は転校生が二人います。それでは入って下さい」

「失礼します」

ざわめきが止まる

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかとおもいますが、皆さんよろしく願います」

「お、男…?」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を・
・・・」

「きゃ・・・・・・・・・・」

「はい?」

「きゃああああー」

女子達のソニックウェーブが襲う

「男子!! 3人目の男子!!」

「しかも、うちのクラス!」

「美形! 守ってあげたくなる系の!」

「地球に生まれてよかった????????」

続いて

「あいさつをしろラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではおまえも一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・」

「あ、あの、以上・・・・・・・・ですか？」

「以上だ」

ラウラはあいさつをすると一夏の目の前にいく

「！貴様が――」

バシンッ！

「・・・・・・・・」

「う？」

いきなり、一夏は殴られた。それも無駄のない平手打ちで

その頃大介は

「すまん。みんな遅れた」

「大丈夫ですよ。そんなに待っていません。それにあなたはトップ
といえど今は学生ですし」

薄暗い部屋に12人の男女がいる

「それではみんな始めようか。・・・・・・・・」

無人機だが、詳細がわかり次第報告してくれ。以上だが何か意見があれば言ってくれ」

「無いか・・ならば解散だ。みんな仕事に戻ってくれ」

大介 side

「大介さん。お疲れ様です」

「龍さんか。久しぶり」

「ああ。よろしてもらっつよ」

ブラック・ロード

「みんなご苦労様！」

「「「覇牙准将お疲れ様です！！」」」

相変わらず凄いなここは

「覇牙准将！！お久しぶりです」

「ああ久しぶり。元気そうで何よりだよ。あと、いつも通りで頼むよ。俺が堅苦しいのは嫌いなんだって知ってるだろ」

彼女は緒方花凜。龍さんの妹にして俺の『ゴッド・フリーダム』の開発主任だ

ちなみに頭脳は篠ノ乃東以上である

「はい、それじゃー大介さん。久しぶり」

「うん。それでいい」

「ところで『ゴッド・フリーダム』はどおですか」

「ああ、機動性が半端ないけど扱いやすいかな。あつそれとあの機体はどうなってる？」

「そうですか。あ、えつと一応20%位ですね」

「そうか。・・・まあいい。出来れば使うことがないほうがいいん

「ただどな」

「ええ」

男達が会話が終わる頃には日が沈んでいた

大介 side out

学園 side

大介が休んで2日目

シャルルは大介と同室なのだが当の大介はいない

「大介もこの学園にいたなんて知らなかったな。しかも大介と同じ部屋だなんて／＼／＼」

1人、部屋の中で顔を赤らめるシャルルだった

翌日

アリーナ

一夏がシャルル、セシリア、鈴、幕にISの操縦方を習っているとラウラが現れた

「おい」

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話がはやい。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様になくても私にはある」

「夏は昔の思い出したくない記憶を思い出す

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は、貴様の存在を認めない」
らしい

「また今度な」

「ふん。ならば……戦わざるを得ないようにしてやる！」

ラウラのISの大型の実弾砲が火を噴いた

「！」

ゴガギンッ！！

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホツトなのかな？」

「貴様……」

「フランスの第二世代型ごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型よりはつづけるだろうからね」

互いににらみ合い、いつ始まってても可笑しくない状態になる

『その生徒！！何をやっている！学年とクラス、出席番号をいえ』！

千冬の一喝により対決は後日となった

学園side out

大介side

「じゃみんなまたな！」

「」「お気をつけて！」「」

俺は『ブラック・ロード』をあとにする

はーまた、4時間の道のりかゝ
帰ったらシャワー浴びて寝よう

俺は『ゴッド・フリーダム』を展開するとISS学園に向けて飛び立った

地獄の訓練と転校生（後書き）

次回からシャルが大活躍する予定です

IS?武装説明

?オリキャラ説明(前書き)

修正しました

IS? 武装説明

? オリキャラ説明

フリーダム・ハート

【ゴッド・フリーダム】の近接戦闘専用の武器で使用时以外は黒い丸い宝石になっている。

黒い宝石から、大太刀、槍、双剣の三種類に変化可能である
武器の展開までに0、02秒と短縮された

変形時の名前

大太刀【覇絶】（はぜつ）

槍【覇滅】（はめつ）

双剣【双覇】（そうは）

状況に応じて使い分ける

また、どの武器も元は同じなので威力は変わらない

ナイトオブワン専属メカニックでもある【緒方花凜】によって開発された武装

研究中の変化可能な武装の実験機として開発された

今のところ、三種類の武器しか変化できないが最大五種類まで変化できるようにしたいと考えられている

オリキャラ紹介

おがたりゆーいち
緒方龍一

23歳 【ブラック・ロード】所長

大介のよき理解者であり兄貴分である

緒方花凜 （おがたかりん）
18歳

緒方龍一の妹にしてナイトオブワン専属メカニックである

【ゴッド・フリーダム】の開発主任でもある

大介と年が近いせいか姉と言うより友達である

また、IS開発者の篠ノ之束の最初で最後の弟子であり、彼女のIQは自分以上だと篠ノ之束本人が語っているほどである

さらに、霸牙大介に見定められた選りすぐりの技術者たちに篠ノ之束から教わった技術を伝授したため、【ブラック・ロード】の技術者たちのほとんどが篠ノ之束に近いかそれ以上の技術と頭脳を持つ

ことになった

IS?武装説明

?オリキャラ説明(後書き)

まだまだあるんですけど
いまはここまでです

再会と約束そして発展（前書き）

シャル可愛い♡

辛抱たまらん！！

と言うわけでシャルと主人公を幼なじみにしました

やっぱり幼なじみと違って憧れますよね

再会と約束そして発展

一夏とラウラの一件が終わり各自部屋にいた

シャルル side

あゝ 大変だったな

でも、一夏ってボーデヴィツヒさんと何かあったのかな？

それにしてもどうしよう

大介がIS学園にいるなんて聞いてないよ

わざわざ男装してまできたのにバレちゃうよ

「でも大介、僕のこと覚えてるかな？」

もう8年位かな、大介に会えなくなってから

「あの時の大介かつこよかったな／＼／＼」

思い出ただけで顔が熱くなってきた

「シャワー浴びてスッキリしよう」

僕はコルセットを外しシャワーに向かった

シャルル side out

大介は約4時間かけIS学園へと戻ってきた

「つ、疲れた…早く部屋に行きたいけどその前に千冬姉さんのところに行かないとな」

大介は疲労した体にムチ打って職員室へと向かった

職員室

「失礼します。織斑先生はいらっしゃいますか？」

入ってすぐ千冬がやってきた

「無事帰ったか、大介」

「はい、千冬姉さん。でも、やっぱりキツイよな、往復8時間とか」

「たしかにな。まあしかした。無事に帰ってきたのなら問題ない」

「そっすか。んじゃ、あいさつ終わったんで部屋行ってねますわ」

「あつ大介、転校生が「失礼しました」たくっあいつときたら」

大介は千冬の話最後まで聞かずに部屋へと向かった

大介side

あゝ眠いゝ死ぬゝ

帰ったらシャワー浴びて直ぐ寝よう
じゃないとマジで死ぬ

俺は部屋までの道のりでこの事だけ考えていた

部屋の前に立つ

愛しき我がroomよ
今帰ったよ

ガチャ

俺は部屋に入るなり一目散にシャワーへと向かった

ガチャ

「えっ……だ、大介!？」

見覚えのある綺麗な金髪と、
 ほどよく膨らんだ胸、C位だろうか

つか、シャルだろ！！なんでここにいるんだ！？

「おう……え」と、失礼しました」

「.....うん / / / /」

ガチャ

又ウオ

~~~~~



「えっと、その、聞かないの？僕がなんているか」

シャル・・・・・・・・・・

「だいたい予想はできるよ。大方あの親父だろ？」

「・・・・・・・・うん」

やっぱりか

たくっ

あのくそじじいが！！

「目的としては一夏と白式の情報ってところかな」

「すごいね大介。完璧だよ。」

「てかシャルよ。お前、なんで男のふりしてるんだ？」

「えっ！？なんでわかったの？」

「いや、ベッドにコルセットがあったからさ。女が胸隠す必要ないだろ」

「えっと、その、広告塔っていえばいいのかな。デュノア社の」  
なるほど

「プラス、男だったら一夏に接触しやすいってところか」

「正解。でも、もうおしまい。大介に見つかっちゃったからきつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ…潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

それからシャルは自分に起こったことを全て話してくれた

「……………」

たしかにデュノア社は今経営危機だ。

やっぱり第二世代型では経営は厳しいよな　俺には関係ないけど

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。」

「たくつしょうがねーな。」

「おいシャル！！お前は本当にそれでいいのか？」

「え…」

「本当にそれでいいのかって聞いてるんだよ！！親がなんだっていうんだ。お前はあのくそじじいに自分の自由を奪われていいのか？」

「だ、大介……？」

「たしかにお前はデュノアの親父と愛人の子供かもしれない。でもそれがなんだっていうんだよ。愛人の子供だから差別される？ふざ

けるのも大概にしゃがれ!!」

ふざけんじゃねーよ!!なんで親に子供の自由を奪われなきゃならない。

子供を愛さない親なんておやじゃねえよ

「ど、どうしたの?大介、変だよ?」

「あ、ああ……悪い。つい熱くなっちゃって」

「いいけど……本当にどうしたの?」

シャルにだったら話すか

「実はな……俺は覇牙の本当の子供じゃないんだ」

「え……」

「昔な、俺がまだ3歳頃かな……本当の親がな、テロに巻き込まれて死んだんだ。そのあと、親父の親友だった覇牙の家に引き取られた」

「えっ!?でも、大介もご両親もあんなに仲良かったでしょ?」

「ああ。でも、ああなるまで1年半かかったよ。正直、最初は覇牙の家が嫌いだった。でも、あの人達はよそ者の俺に言ってくれたんだ

(お前は俺達の大事な息子だ。血は繋がってないけど大切な家族なんだ!!)

てな」

「大介・・・・・・・・」

「涙が溢れたよ。四歳だった俺にもよく伝わったよ  
あの人達は俺を家族にしてくれた。愛してくれた

俺は許せないんだ。子供を大切にできない親がいるのかな。」

「その・・・・・・・・ゴメン」

「気にすんなよ。今の俺にはみんながいる。本当の親にはもう会えないけど俺の心で生きつつけるからな。それより、シャルはこれからどうするんだよ？」

「どうって・・・・・・・・時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知ったら黙ってないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「それでいいのか？」

「よくも悪くもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ」  
たくよ

「なあシャル。お前は忘れち待ったか？あの日の約束」

「忘れるわけないよ」

大介 side out

————— 回想

8年前

日本 霸牙家

「大介、テーブル拭いてくれた？」

母親がキッチンから息子に話しかけた

「うん！バッチリ」

母親は出来上がった料理を運んできた

「おお、良くできてるじゃん」

「いいにおい」

「こら、まだダメだよ。母さんの友達が来たらね」

「はい」

仲睦まじい親子の光景だった

ピンポン

「はい」

母親が扉を開けると母親と同年代の女性と、大介と同じ位の少女がいた

「あらひさしぶり。ようこそ我が家へ」

「ひさしぶり。シャルロットご挨拶は？」

母親に言われ金髪の少女があいさつをする

「しゃ、シャルロット・デュノアです」

「はじめましてシャルロットちゃん。ほら大介、あいさつ!!」

「はじめまして、覇牙・A・大介です」

「あらゝ礼儀正しい子ね」

「ふふ。ありがと。ささ、上がって!!」

「「お邪魔します」」

シャルロット親子でした

大介side

食事を取り終え俺とシャルロットは近所の公園にいた

ことの発端は母親だった

「大介!シャルロットちゃんと遊んで来なさい」

と言われた

どうしよう

「シャルロットちゃん!!何して遊びたい?」

「え、えつと私は………」おっ!!覇牙じやん。何、女の子連れて遊んでんだよ」

三年生の自称不良が五人絡んできた

あゝめんどくせ

でも、シャルロットちゃんがいるから穏便に済まさないと

「なんだよあんたら?俺らに何か用か?用がないならあっちいけ」

「1年の癖に生意気だぞ!!その女の子を寄越せ」

自称不良がシャルロットちゃんの腕を掴んだ

「痛っ!?!」

ブツッ

切れちゃったよ(笑)

「おい!!テメーこっちが大人しくしてやればいい気になりやがって!!女を傷つける奴は許さね」

ガスッボキッドゴツバコッドスツメキッ

「ギャー」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「助けてー」

「イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ」

それぞれの悲鳴が聞こえた

1人は失神している

シャルロットちゃんはポカーンとしている

「シャルロットちゃん帰ろう」

「う、うん／＼／＼」

俺はシャルロットちゃんの手を握り家へと向かった

覇牙家

「ただいま」

「あらお帰り」

母親にあいさつをするとシャルロットちゃんと二階の俺の部屋に向かった

「なんか大介くんとシャルロット、手繋いでなかった?・・・二ヤリ」

「ええ・・・・・・・・二ヤリ」

大介部屋

「えと、何する?」

「うんと、大介くんがやりたいの」

「俺が・・・・・・・・・・・・・・・・それじゃお話しようか」

「うん!」

俺とシャルロットちゃんはいろいろな話をした

「ねえ、大介くん?なんでさっき私を助けてくれたの?」

「さっきつてあいつらをブチのめしたこと?」

「う、うん」

「そうだな。シャルロットちゃんを守りたかったからかな」

「私を?」

「うん。なんかシャルロットちゃんがあいつに腕を掴まれて痛がった瞬間、俺の中で何か切れちゃったんだ」

「そ、そうなんだ。私は嬉しかったよ。私、怖くて動けなかったもん。

ねえ大介くん。これから私を守ってくれる？」

「えっ！？……うん！！俺がシャルロットちゃんをどんな時でも守ってやるよ！！」

「大介くん、約束だよ？」

「うん！！約束だ」

指切りの仕方を教えて指切りで約束をした

シャルロットちゃんの名前が長いのでシャルと呼ぶことになった  
ついでに俺も呼び捨てにもらった

翌日

シャルがフランスに帰るので空港まで見送りにきた

「バイバイ。シャル」

「……………うん」

く、暗い

瞬間、シャルは俺に近づき耳元でささやいた

「大介・・・・・・・・大好き！！／／／／」

シャルはそうささやくと俺の頬にキスをした

「えっ！？」

え

「あらあら、まあまあ」

母達が微笑んでいた

大介 side out

回想終了

「あの日約束しただろ？俺が何があっても守ってやるって」

「うん」

大介はシャルロットを抱きしめる

「だ、大介！？／／／／」

「ここにいろ!!シャル」

「えっでも!!」

「言っただろ？俺が守るって。どんなことからでもお前を守ってやる！！」

それに俺はナイトオブラウンズ最強のナイトオブワンだ。どんな危機的状況も打破してきた男だ！！」

「えっ！？大介が？」

「ああ。だから俺を信じろ！！。そして、この学園での三年間で自分のしたいことを見つけるんだ。ゆっくりとな」

「本当に大介が守ってくれるの？」

シャルロットは涙を浮かべながら大介に尋ねた

「ああ。だからそんな顔するな。お前は笑顔の方が似合うからさ」

「うん！！」

この時、ひさしぶりにシャルロットは笑った  
それはまるで太陽のように美しい笑顔だった

その後、シャルロットは大介と昔の話をした

大介 side

「ねえ大介？」

「どうした？」

「あの日、僕が言ったこと覚えてるかな？」

「あの日？」

「うん。僕がフランスに帰る時に言ったこと」

「えっと・・・・・・・・・・」

ジー

シャルロットが真面目な顔で俺をみる

「・・・・・・・・・・もしかして最後に言ったことか？」

「うん！うん！！」

ものすごい勢いで首を縦に振る

「えつと俺のこと”好き”って言うてくれたことか？・・・・・・・・・・  
・えゝと冗談だったんだろ？」

「冗談じゃないよ！！本気だよ！！  
もー・・・・・・・・・・なら！！」

チュッ

「へ！？シャル！？」

8年前のように俺の頬にキスをした

「わかってくれたかな？僕が本気だつて」

「あ、おう・・・・・・・・・・えと、俺は・・・・・・・・・・」

俺の答えは8年前から決まっている

8年前のあの日、あいつらをぼこにした日のことを母さんに話したら それはシャルのことが好きなんじゃない？と母さんに言われた。

母さんに言われて自分の気持ちに気付いた

自分の気持ちに気付いたとき、顔が熱くなったのをよく覚えている

だから！！

「俺も、シャルがす「シャルル！！いるか？」一夏！？」

「大介どうしよう」

「シャル、ベッドにいけ！！早く」

「う、うん」

シャルをベッドに寝かし入り口の方に行く

「よ、よう一夏！！ひさしぶり」

「お！！大介帰ってたのか？えと、シャルルは？」

「シャルル？・・・・・・・・・・っと、シャルルは具合が悪いつて寝てるぞ。マジで」

シャルのやつ偽名使ってたのか

焦った・・・・・・・・

「そつか、シャルル、お大事にな。んじゃ大介、飯にいかないか？」

「ゴホツゴホツありがと一夏。大介、僕のことはいいいから行ってきたら？」

「あ、わかった。んじゃ、飯もって帰ってくるからな。一夏行くぞ！！」

「お、おう」

俺と一夏は食堂に向かった

大介side out

シャルルside

大介行っちゃった・・・・・・・・

僕はと一夏を見送ると、ベッドに寝ころがる

大介が守ってくれるって言ったくれた瞬間とてもドキドキしたそれに僕の気持ち伝えちゃった

8年前にも伝えたけど冗談だと思ってたなんてひどいよね

大介はどう思ってるんだろ？

さっき何か言ってたけど聞こえなかった  
もしも断られたらどうしよう。つい流れで告白しちゃった僕はバカ  
だな・・・・・・・・・・・・・・・・

それに、大介がナイトオブ라운ズのナイトオブワンだなんて知ら  
なかった。  
ナイトオブ라운ズはほとんど顔が出回ってないからしょうがない  
けど

そんなことを考えていると大介が帰ってきた

シャルルside out

大介side

みんなしつこかったな。特に一夏だ。  
あいつが一番しつこかった。千冬姉さんが来なかったら俺がシバい  
てた

「ただいま」。飯もってきたぞ」

「お帰り、大介」

部屋に入るとシャルがベッドに座っていた

「焼き鮭定食にしたんだけどよかったか？」

「うん。ありがとう」

シャルは礼を言い定食を食べようとした瞬間固まった。

しまった！！シャルは箸が苦手だったの忘れてた

「悪い！！お前が箸苦手なの忘れてた。ちょっと待ってる。取ってくる」

「い、いいよ！！大丈夫だから！！」

「そ、そうか？」

シャルは俺を止めると箸を持ちご飯を食べようとするが上手くできない

「うっ……………大介？」

「なんだ？」

「食べさせて」

「……………ハッ！？」

「ダメ？」

そんな目で俺を見るな  
ホントしょうがないな

「ほら貸せ!!食べさせてやるから」

「えっ!?!ホント!!」

「早くしろ!やらないぞ?」

「待つて!!.....はい!!」

シャルは満面の笑みで箸を渡してきた

「ハー.....どれからがいい?」

「えっと、鮭がいい」

「了解。ほら、あーん」

「あーん」

「美味しいか?」

「うん!!」

そんなこんなでシャルの食事が終わった

「ところで大介?」

「ん?」

「さっき、一夏がくる前に僕に何か言ってたよね?何かな?」



「嬉しいから泣いてるんだよ。初恋だったんだもん。8年前から、初めて会ったときから好きだったんだもん」

うれしいな。こんなに俺のこと想ってくれてたなんて

「俺もだよ。でも、母さんに教えられるまで気付かなかった。母さんに教えられて初めてシャルのことが好きなんだって気付いたんだ。そして8年間ずっとシャルのことを想ってた」

「嬉しい……嬉しいよ！！大介」

「ほら、泣くなって！！つか泣き止め」

俺はシャルを抱きしめる

「シャル、顔上げろ」

「えっ！？んつつ！？」

俺はシャルにキスをしてしまった  
しかも、唇に

「プハッ

シャル？涙止まったか？」

「う、うん。」

「俺のファーストキスはお前にあげたぞ」

「ぼ、ぼ、僕だってファーストキスだよ！！唇には初めてだもん」

「よかった。それに涙は止まったな」

「うん」

「そんじゃ寝るか？もう、１１時過ぎだし」

「うん」

「んじゃ俺はシャワー浴びてから寝るから先に寝てていいぞ」

「うん。それじゃお休み大介」

「おう！！お休みシャル」

そして俺はシャワーを浴びに行った

大介 side out

シャルル side

大介がシャワーに行ってから数分ぼーっとしていた

「・・・・・・・・・・・・・・・・大介と恋人になれた／＼／＼／  
夢じゃないよね？」

でも、８年間諦めないでよかったな

「そろそろ寝よう」

僕が布団に入り寝ようとしたとき大介が戻ってきた

「シャル、起きてるか？」

なぜだか寝たふりをしてしまった僕だった

シャルル side out

大介 side

シャルは寝ちゃったか

「しょうがない」

俺は携帯である人に連絡を入れる

「あ、もしもし龍さん？ちょっとお願いしたいことがあるんだけど」

『おや、珍しいね。どうしたんだい？』

「ああ、ちょっとデュノア社の裏側を調べてくれないか」

『デュノア社か…わかった』

「なんなら、ナイトオブワン専属の諜報部隊を使っても構わない」

『わかったよ。でも、大介くん、声に張りがあるね。何かいいことあったかい？』

「まあね。大切な人を助けるためなんだ。俺の力でもどうにかなるけどそれは最終手段だよ。奴らの弱みを握って黙らせる」

『技術提供もした方が話は穏やかに終わると思うけど』

「そうだね。わかった、うち【ブラック・ロード】の一部の技術を提供しよう。第四世代型のデータを提供してやってくれ」

『わかった。話がつき次第連絡するよ。それじゃ』

話が終わり携帯をベッドに投げる

「明日、シャルに話さなきゃならないな」

シャルを見ると少し目元が濡れていた

俺はそつとぬぐう

「お休みシャル」

シャルの頬にそつとキスをしてベッドに入った

その時俺はシャルが起きていることに気付かなかった

大介 side out

## 再会と約束そして発展（後書き）

なんといきなりシャルと主人公が恋人になってしまいました

まーその方が今後の話の展開が楽なもので

なんか最近、シャル以外の原作ヒロインは空気になっちゃいました

なんかすみません

それではまた次回

## 軍人vs軍人（前書き）

ラウラとの決戦が……

## 軍人vs軍人

朝シャルロットが目を覚ますと大介の姿が見当たらなかった

「大介どこ行っただろ？」

まだ、5時30分である。一般的にまだ早い時間だった

「大介？」

一応部屋の隅々まで探してみるが見つからない

「ホントどこ行っちゃったんだろ？」

シャルロットは紅茶を入れるとベッドに座った

「ふゝ疲れた。あれ！？シャル起きちゃったのか？」

「うん。大介どこ行ってたの？」

「ああ、朝のトレーニングだよ。毎日やらないと鈍るからな。毎朝やってるんだ」

「そうなんだ。びっくりしちゃったよ。朝起きたら大介がいないから昨日のことが夢だったのになって思っちゃった。んっっ！？」

「夢じゃないだろ？」

「う、うん。大介、いきなり過ぎだよ／＼／＼」

大介にキスをされ昨日のことが夢ではないことを改めて認識したシャルロットだった

「ところでシャル。大切な話が「昨日聞いちゃったんだ」なんだ、起きていたのか？」

「う、うん。大介が僕を呼んだ時、狸寝入りしてたんだ」

「そうか……なら内容はわかるな？」

「うん」

「一応はお前の親なんだ。お前にだって知る権利はある」

「大介はお父さんをどうするの？」

「一応な、あちらさんに不利な情報と俺の研究機関の第四世代型のデータを餌にしてシャルを自由にさせる。自由と言っても、もう人形扱いはさせないと言うことと、普通に女の子として学園に通わせるってことだぞ？」

「なんかすごいね」

「シャルも男のふりずつとしてるのはきついだろ？それにシャルにはやっぱり女の子として学園生活を送ってほしいんだ」

「大介……ありがとう」

「シャル……」

そんなとき

「大介、シャルル、飯いこうぜー」

二人のいい雰囲気をブチ壊すように一夏が現れた  
幸いにもシャルロットはコルセットをつけていたので女であることはバレなかった

「よう一夏。いろんな意味ありがとうよ」

嫌みを込めたように一夏に言う

「大介なんで不機嫌なんだよ？」

「別に、シャルロモといシャルルいこうぜー」

「うん。ちょっと待ってて」

一夏、大介、シャルルは食堂へと向かった

## 食堂

大介 side

食堂に行くと千冬姉さんがいた

「織斑先生、おはようございます」

「うむ。おはよう」

「ところで織斑先生？シャルルのこと知って俺の部屋にしたんですか？」

「当たり前だろうが馬鹿者が！！一夏などに任せられるか！！それに女子の部屋にしたら喰われていたぞ」

「まー確かに……………」

「つか先生、転校生がいたんですね。知りませんでした」

「それは貴様が昨日私の話の途中で部屋に帰ったのが悪いんだろ  
うが」

「ひ、否定はしません。あと、シャルのほかの転校生がボーデ  
ヴィッヒって本当ですか」

「ああ。転校初日に一夏を殴ったしな」

「はーそうですか。ありがとうございました」

俺は千冬姉さんに礼を言いシャルの隣へと座る

つかボーデヴィッヒか。確か一夏に対して嫉妬心が大きかったな

「大介、織斑先生となんの話してたの？」

「ああ。ボーデヴィツヒの話」

「大介くってボーデヴィツヒさんと知り合いだったの？」

「ああ、まあな」

「ホントかよ!!」

「一夏の食いつきがすごいな」

「昔な、ラウンズの任務でドイツに行ったんだよ。そのときに模擬戦を申し込まれてな。」

その時ドイツ軍のお偉いさんが冷や汗かいてたよ。で模擬戦をやつてめつたためにしてやつたんだ。んで帰ろうとしたら千冬姉さんに捕まつて強制的に二週間無理やりドイツにいさせられたんだ」

「な、なんか大変だったね。はははは」

「でもなんで俺はあんなに嫌われてるんだろ？」

「一夏よ。嫌よ嫌よもすきのうちって言うだろ？実際はお前のごことが大好きなんだよ（笑）」

「そーなのか……………って（笑）じゃねーよ!!」

「……はははは」

朝食がおわり俺らは授業に向かった

教室

「………というわけです。何かわからないことはありますか？」

俺らはいま、山田先生の授業を受けている  
分かりやすく、効率の良い授業であつた  
しかし眠い… 疲労が半端ない

眠い… . . z z z z

「霸牙くん？大丈夫ですか？」

「あ、はい！！大丈夫です」  
はっ！？

危ない、危ない 寝るところだつた

なんか千冬姉さんがこつち睨んでるし  
怖い…

大介 s i d e o u t

シャルル s i d e

なんか大介が眠そうだな

あ、山田先生が大介に何か言ってる

大介、目が死んでるよ

確か、往復で八時間もISで飛行してたんだっけ？

昨日も僕のせいで寝るのが遅くなっちゃったしなんか悪いな

それに大介が急に積極的になっちゃって二人っきりのときは不意打ちでキスしてくるし・・・・・・嬉しいけどね／  
／／

あゝ思いだしたら顔が熱くなってきた

「デュノアくん？具合でも悪いんですか？」

「は、はい！！大丈夫です」

うゝ 大介のせいだ。

シャルルside out

一夏side

大介は眠たそうでシャルルは顔が真っ赤になっていた

何かあったのかなゝ

ファゝ

あくびがでる

その瞬間頭に衝撃が走った

「イッテゝ」

ふと見るとそこには関羽がいた

バシッ

「イッテ」

千冬姉！！なんで二回も殴るんだよ？」

「織斑先生だ。それにお前が失礼なこと考えていると思ったから殴った。悪いか？」

「いえ、悪くないです。私が悪かったです」

「わかればいいんだ。わかれば」

うちの姉ちゃんは何処の女王様だよ

脳細胞がいくつか死んだな…

一夏side out

授業が終わり一夏は大介の席に行った

「大介……だ、大丈夫か？」

「一夏、てめえ人の眠りを妨げるんじゃない！殺すぞ！！」

「あ、いや悪りーな。えと、お休み」

「．．ZZZZ．．．．．」

大介が深い眠りについたので一夏はシャルルの席に向かった

「よお！シャルル。風邪引いたのか」

「う、うん。違うよ。なんでもないんだ」

「そうか？まあ何かあったら言ってくれ」

「う、うん。ありがとう」

その後大介は昼休みまで熟睡していたのは言うまでもない

昼休み

「よく寝たゝつかなんか頭イテー」

大介が大きく伸びる

授業中爆睡していた大介は千冬に殴られていたがいくら殴っても起きないため流石の千冬も諦めたのだった

「なゝ大介、屋上行かないか？」

「ああ良いけど、シャルルお前も来るだろ？」

「あっうん!!」

一夏は介とシャルルを連れて屋上に向かった

それから一夏がセシリアの殺人料理によって天に召された

「シャルル、アリーナにこうぜー」

介がピクピクと蠢く一夏をつつきながら言った

「あ、うん。でも、一夏どうするの？」

「いいよ、死んでる訳じゃないし。まっもしかしたら授業に遅れて千冬姉さんにブチ殺されるかもしれないがな。行くぞ」

「うん。一夏、遅れないようにしてね」

介とシャルルはアリーナに向かった

アリーナ 更衣室

「シャル。後ろ向いてるから着替えちゃいな」

「うん。見ないでね？」

「見ねーよ」

シャルルが着替え始める

チラッ

「介／＼／＼、見たでしょ？」

「えつと…悪い」

「大介のエッチ／＼／／」

「グハッッ」

大介は100のダメージを受けた

「ねえ大介？」

「ん？」

「部屋ではさキスしてくれるのに外ではしてくれないの？」

「いやさ、したいけどさ、シャルは外では一応男になってるだろ。だから、あまり目立つことをしたくないんだ」

「ふーん（別にしてくれて良いのに。肝心なところで真面目なんだから）」

その後アリーナで整列しているとき一夏が遅れてやって来て千冬姉さんに何をされたかは皆さんのご想像におまかせします

アリーナ

「今日の実習はまず模擬戦をしてもらう。そうだな、……ラウラー！！前に出る」

「はっ！！」

ラウラが千冬に言われ前に立つ

「相手はそうだな・・・・・・・・・・覇牙！お前がやれ」

「なんでですか？俺がやったら見本にならないでしょうが！」

「私はやれと言ったのだが？それにお前がレベルを落としてやればいいだろ」

「はー・・・・・・・・わかりましたよ。やれば良いんですよ」

「普通にはいと言え」

俺は半強制的に模擬戦へと参加させられた

「よお、ボーデヴィツヒ！！ひさしぶりだな？」

「黒き霸王ことナイトオブワン、覇牙・A・大介か。今度こそ、貴様を倒してやる」

「やれるもんならやってみるよ？まあ、あの時と同じ結果だと思うがな」

互いに睨み合う

すでにラウラは【シユヴァルツェア・レーゲン】を展開していた

「覇牙お前も展開しろ」

大介も【ゴッド・フリーダム】を展開する

「大介のIS初めてみた。・・・・・・・・全身装甲、なんかカッコい

い」

一人歓喜しているシャルをよそに模擬戦が始まった

「まずは確かめる……！」

大介は【イグニッションブースト】でラウラに突っ込んだ

「血迷ったか？前までの私ではない……！」

大介にワイヤーブレードが襲いかかるが大介は難なくかわす

「おい、当たってないぞ？」

「ふ、わざと外してやったんだ。そこだ……喰らえ」

ラウラは大介の位置を捉え大口径レールカノンが発射される

「だから、当たらないって……！お前じゃ無理なんだよ」

大介は【フリーダム・ハート】を【覇絶】に変形させ、【シュヴァルツェア・レーゲン】の武装を無力化する

「くっ……？な、舐めるな……！」

ラウラがAICを発動させ、大介の【覇絶】を止める

「ちっAIC搭載型か。面倒いな。だか、俺には通用しない」

大介は翼部のドラグーンを展開しオールレンジ攻撃を行う

「邪魔だ!!」

ラウラは必死にドラグーンを落とそうとするが攻撃が当たらない  
さらに意識がドラグーンに行ってしまったため、A I Cが解除される

「一つのことにはしか頭が回らないところがお前の悪いところだ」

大介はそのままラウラに突っ込み、腹部に蹴りを入れる

「くっ!?」まだまだ!!」邪魔なビット兵器だ!!」

ラウラは意識を集中出来ないため、A I Cが発動出来ない

「ハアアア………喰らえ!! 霸王斬空拳!!」

「うっー!!」

ラウラの鳩尾に拳で殴った瞬間、ラウラの体がくの字になり飛んで  
いった

ラウラは薄れゆく意識の中で大介の言葉がきこえた

「ボーデヴィツヒ。お前は何か力を欲する? その力で何がしたい?  
それに気付かなければお前は一生俺には勝てない。」

ラウラは意識を失った

ラウラが医務室につれていかれる

「馬鹿者!! やりすぎだ」

「いや、本気でやった覚えはないんですけど」

「お前の軽めで奴らの本気だ。ラウンズが代表候補におとなげなかったな」

「でも、あいつには力の使い方を教えなかったらいつか失敗するでしょうね。だから力の使い方の違いを見せてやったんだ。でも俺、不器用だから、ああなっちゃいました」

「確かにそうだな。遅かれ早かれ教えておく必要があるな。しかし、あいつには言葉で言わないと気付かないぞ」

「まあ、そこらへんは先生に任せます」

「わかった」

大介と千冬の話が終わった

シャルル side

大介、容赦ないな  
女の子相手なのに……………

でも、強いな。ボーデヴィッヒさんって代表候補の中でもトップクラスなのに一瞬だったよね

僕じゃ勝てないな

あっ大介が帰ってきた

「大介お疲れ様！！」

「おお、でもあまり良い内容じゃなかったよな」

「まあちよつとね、でも大介！！格好よかったよ」

大介は僕の耳元でいった

大介の顔が赤くなる  
可愛い／／／／

「おい、シャル。部屋にいったら覚えてろよ」

同じく耳元で言う

「アウ／／／／」

ずるいよ／大介！？

シャル side out

こうしてラウラと大介の模擬戦が終わった

その後、【シュヴァルツエア・レーゲン】が大破したため、学年別トーナメントまで一夏に闘いを挑まなかったそう

医務室

夕日が沈み始めた頃ラウラは目覚めた

「また………負けたか」

ラウラが呟くと千冬が医務室に入ってきた

「目覚めたか。昔よりは気絶している時間が短縮されたな」

「……………」

「ふっ冗談だ」

そして千冬はラウラに力がなんたるものを教えた

「教官、私には理解することができません」

「まあその内自分で気付くと思うが手遅れにならないうちに気付けよ。あと、お前の『シュヴァルツェア・レーゲン』は大破状態だよって、トーナメントまで使用することは出来んぞ」

「なっ!?!」

千冬はそれだけ言い残すと医務室をあとにした

軍人VS軍人（後書き）

ネタがない・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2136r/>

---

IS インフィニットストラトス 未来を切り開く翼

2011年5月6日18時58分発行